

# プロトコル分析を用いた地域イメージの想起プロセスに関する研究

藤井 元希<sup>1</sup>・佐々木 葉<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 非会員 早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻

(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, Email: unvollendete.g@fuji.waseda.jp)

<sup>2</sup> 正会員 博士(工学) 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科

(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, Email: yoh@waseda.jp)

本研究では住民が地域イメージを想起する際のプロセスに着目し想起される対象とその関係性を明らかにしていく。住民の地域イメージの想起プロセスを記述するために住民に対して地域のイメージマップを描くという実験と写真を提示して写真の風景から想起した内容を語る2種類の実験を行い、その過程で得られた言語報告データをプロトコル分析した。その結果地域イメージの想起のプロセスを記述することができ眺望景には発言の量も多く風景に写る場所以外の他の場所への言及が見られるなど対象の特性と想起の関係を把握した。

**キーワード:** 地域イメージ, プロトコル分析, 想起プロセス, 言語報告データ

## 1. 研究の背景と目的

地域イメージの想起と共有が難しくなってきたり、地域の中へ自己が定位しにくくなってきている。地域のような広域の景観は特定の視点からのシーン景観や一連のシークエンス景観として捉えられるものではなく、地域内の人々の日常的移動や生活活動のなかで形成されるものであり、全体像を一度に把握することはできない。そのため、従来の景観把握モデルでは記述しきれず、新たな景観モデルが必要である。そのような新たな景観モデルを構築していくためにそこに住む人々の地域景観認識の構造を明らかにしていく必要がある。

住民が持つ地域認識を明らかにしていくということは、自己が地域の中でどのように定位されるかを明らかにし、それにより人がどのようにして心の安息を得ているかを明らかにする事に繋がっていくと考える。つまり、どのようにして住民は眺めを自分の地域の景観として体験し、辺りの景観に拠って自分がここにいるという定位感覚を授かり、自己の身体をその場所に繋ぎ留めているかを明らかにすることに繋がっていく。この自己の身体をその場所に定位する作用を中村は「投錨」<sup>1)</sup>と表現している。

眺めの中で中村<sup>2)</sup>は大づかみで骨格的な都市の特色がある具体的な視点から景観的に把握できるような局面が景観表現のなかに場所の個性として現れてくることに触

れている。そのような地域の特色が表れる「特性景」<sup>3)</sup>のような代表的な景観は空間構造の大枠を捉えやすく、あるいはその人の地域での体験やその場所の持つ意味を想起しやすいと思われる。つまり地域の代表的な景観とは幾つかの個人的な体験が積層され、あるいは地理の大筋などにより個人でも知らぬ間に地域の環境の中に定位され心の無事を得ていると考えられる。

そのような景観を媒体として地域の環境のなかへ自己が定位され、「投錨」できている状態こそが自分と外界の間に調和のとれた関係を確立し、主体に情緒の安定という大切な感覚を与えるのではないだろうか。

本研究では住民が地域イメージを想起する際の思考のプロセスに着目し、想起される対象とその関係から地域認識の生成のプロセスを明らかにしていくことを目的とする。そして、地域イメージの想起のプロセスから地域の環境の中へ自己をいかに定位しているかという事を明らかにしていく。

## 2. 研究の概要

### (1) 既存研究

既存研究ではK・リンチに代表される、住民がその都市に対して抱くイメージに関する研究は多くある。萩下<sup>4)</sup>らは個人の連想の発展、その連関構造

を把握するために、自由連想法を用いたアンケートを実施し、研究対象地において被験者の撮影した写真とそれに対する記述の分析から、主として具体的視覚像としての景観意識の連関構造を抽出した。被験者の記述をもとに異なる写真間の連携構造を抽出し、被験者の意識の連関構造として9パターン抽出した。

また、中村ら<sup>5)</sup>は「場面」という環境と主体の協調的な節目となる体験に着眼し、タスクという行動に伴う目的意識をもとに指標を定めて分析している。都市環境と主体の関係性についてタスク遷移と行動パターン間の支配的關係および、目的達成における偶発的な発見行動の介在を明らかにした。被験者の内観についての考察を言語報告データからプロトコル分析により行うという点で参考としている。

## (2) 概念の整理

中村は風景学入門<sup>1)</sup>においてこのように述べている。

日本の都市は、表情豊かな地相を骨格にしているから、山、海、川などが都市空間記憶の大枠を形成することが多い。(中略) そういう情景がさりげなくとりこまれている都市は、地理の大筋が記憶しやすく、しかもいちいち問わずとも、おおよその位置と方角がおのずと知れる。こうして風景の冥々の加護に導かれて、人々はそれと知らぬ間に、都市空間のなかにしかと定位し投錨し、心の無事を得ているのである。道行く人を精密に誘導する道路標識にくらべると、それはいかにも茫洋としているが、その投錨水深の深さによって人は自己の実在感をもつ。

ここから、投錨とはK・リンチ<sup>6)</sup>が定義したLegibilityと関係があると考えた。Legibilityとは都市の眺めの外見の明瞭さあるいはわかりやすさであり、人が都市の各部分を認識し、さらにそれらをつなぐ筋の通ったパターンに構成するのがたやすいということである。

K・リンチはくっきりとしたイメージを生み出すような生き生きとした、完全にまとまりのある物理的背景というものは、また社会的な役目も果たすものであり、それは素材を集団のコミュニケーションのシンボルあるいは共通の思い出に仕立て上げると述べている。そのような外界の環境はすぐれた環境のイメージを作りだすと考えられる。

また、すぐれた環境のイメージはそのイメージの所有者に情緒の安定という大切な感覚ももたらし、自分と外界の間に調和のとれた関係を確立すること

ができるとも述べている。

この調和のとれた安定した状態は環境の中に自ら定位されている状態であり、住民が環境に「投錨」しその地域に繋ぎとめられ安定した状態であると考えられる。

このことから、「投錨」とは主体がLegibilityを満たした環境をすぐれたイメージを伴って解釈している状態での「主体」と「環境」の関係だと本稿では考えていく。

## (3) 本研究の位置づけ

本研究の研究アプローチは、住民が地域イメージを想起する実験を行い、その実験で語られる発話データを分析することで地域イメージの想起プロセスを明らかにする。

そして、地域イメージの想起プロセスから地域認識の意識化がどのように行われているかを明らかにしていく。

## 3. 研究方法

### (1) 「投錨」が持つ二つの側面について

前述した「投錨」には二つの側面があると考えられる。

ひとつは自らの位置を定位するものとして地域の地理の大筋から投錨をしているもの、つまりK・リンチの「structure」の側面からなるものがあると考えられる。また、個人の経験や環境への意味付けなどから投錨をしているもの、すなわち「meaning」の側面から投錨をしているものがあると考えている。

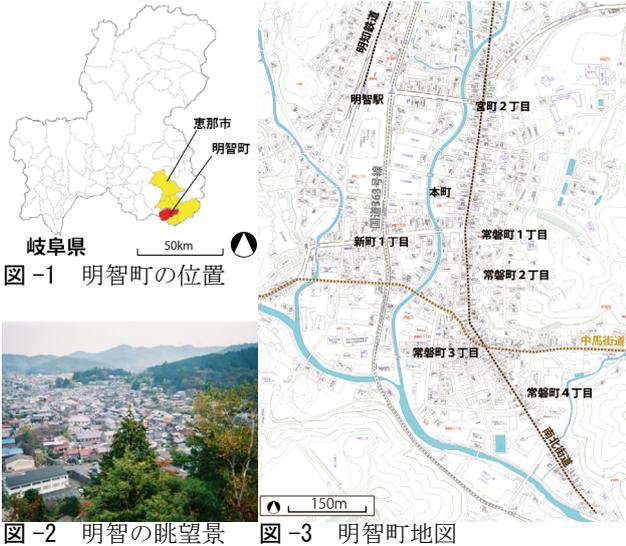
### (2) 研究の方法

地域を想起する実験のひとつは「structure」の側面を問う事を主な目的としてイメージマップを描いてもらう実験と「meaning」の側面を問う事を主な目的として写真を呈示して連想したことを答えてもらう実験の2種類を行う。被験者は実験の手続きの中で地域の想起を行っているはずである。

被験者が地域を想起する実験を行う事により引き出される被験者の言語報告データの発言量、多様性を概念ラベルで表記し、地域イメージの想起プロセスをプロトコル分析から明らかにしていく。被験者が想起する対象とその関係を分析する事で地域に対する認識が意識化される際にはどのようなプロセスを経ているかを明らかにしていく。

## 4. 研究対象地の概要

対象地である岐阜県恵那市明智町は岐阜県の東南端に位置する恵那市の南東端にある盆地の底のまちである。恵那駅からローカル線・明知鉄道で50分で明智駅に到着する。周囲を美濃三河高原の丘陵に囲まれ、中心部を南北街道と中馬街道が走っており、江戸時代は2本の街道が交差する地区を中心に宿場町として栄えた。町域は矢作川水系に属しており、支流の明智川が盆地内を南へ流れている。



## 5. 実験要領

### (1) 実験の流れ

同一の被験者に二種の実験を連続して行う。被験者の行為と発話をビデオカメラとボイスレコーダーで記録する。今回は被験者は明智町に住む住民一人に対して行った結果の分析を示す。

### (2) 実験Ⅰ：イメージマップ作成課題の概要

被験者と対面し白紙のA3用紙に「明智町は山に取り囲まれていると思いますが、山より内側の明智町中心部の地図をざっと描いていただきたいのです。はじめてこの町を訪れた人に、町の主な特徴を含めてしかも大急ぎで説明するような気持ちで、正確でなくてよいので書いてください。また中心部だけでなく周辺などに特徴があると感じていれば是非書いてください。」と指示しイメージマップを作成してもらう。

また、マップを描く際に自分の頭の中で思いついている事を発話するように促す。

### (3) 実験Ⅱ：写真の提示による自由連想法の概要

実験Ⅰの次に被験者と対面した状態で明智町の代表的な写真を一枚ずつ提示し、「この写真を見て、何でも良いですから連想すること、知っているもの、思い出した事や感想をいくつでもいいのであげてください。」という質問を行い。どうしても解答が得られない場合のみ、「例えば、場所や出来事や建物や大まかな地形や行事や体験などです。」という質問を追加し、連想したことを自由に語ってもらう。

なお、実験Ⅱで用いた写真は2009年に行った景観ワークショップで住民が明智町の気になる場所として撮影したものを、2012年8月27日に同じ構図で再撮影したものを用いた。

また、被験者の手元には実験Ⅰで作成したイメージマップを置いておき、位置的な情報がある場合にはイメージマップの中で指し示し語ってもらい、また写真を見て、新たにイメージマップに書き加えることも推奨する。

表-1 実験条件/被験者

| 実験時間 | 45分  | 被験者 | 明智町に住む住民   |
|------|--|-----|--|
| 記録   | 反応を記録するものとして、ビデオカメラでの動画の撮影、ボイスレコーダーでの録音を行う。  | 写真  | 2009年景観まちづくりワークショップで住民が撮影した写真を2012年8月27日に再撮影したものを用いる   |
| 実験課題 | 実験Ⅰ<br>①A3用紙を提示<br>②明智町のイメージマップを描いていただく。この課題をしてもらう事を通じて自分の頭の中を現実中継してもらうように発話するように促す。 | 実験Ⅱ | ①写真を一枚ずつ提示。<br>②連想したことを自由に語ってもらう。<br>③さらに位置的な情報がある場合には実験Ⅰで被験者が作成したイメージマップの中で指し示し語ってもらう。<br>④写真を見て、新たにイメージマップに書き加えることを推奨する。 |

| 被験者No. | 年齢 | 住所     | 職業   | 性別 | 居住歴 |
|--------|----|--------|------|----|-----|
| 1      | 63 | 明智町中心街 | 会社経営 | 男  | 63  |

表-2 実験Ⅱ使用写真



## 6. 実験結果

### (1) プロトコル分析

被験者の地域に対する想起自体の記述のために、実験により獲得した発話の時系列データ、すなわちプロトコルデータの分析を行う。

そのため、プロトコルデータを定量的な指標として扱う事ができるように実験の言語報告データを5秒毎の単位に分割して書き起こし、時間単位毎の発言の内容について規則に基づき判断した上で、概念ラベルを付加していく。

行為カテゴリは表-3に示すように設定した。「時間軸」,「主体と環境」,「行為指標」に関しては実験IとIIで共通しており,実験Iでは「エレメント」,実験IIでは「連想度」を固有の指標として設定している<sup>8)</sup>.

### (2) 実験Iの言語報告データ抽出の結果

実験Iではイメージマップとプロトコルデータの二つを獲得した。撮影した動画により,被験者のイメージマップの書き順とそれに対応した概念ラベルを作成する事ができた。

4つのカテゴリを満たすラベルが付けられたセルは106個である。

### (3) 実験IIの言語報告データ抽出の結果

実験IIでは写真を一枚ずつ呈示してその写真から連想する事についてのプロトコルデータを得た。

4つのカテゴリを満たすラベルが付けられたセルは214個である。

表-3 実験I・IIの行為カテゴリ / 表記例

| 行為カテゴリ01: 時間軸                   |                                      |                        |                                   |   |   |
|---------------------------------|--------------------------------------|------------------------|-----------------------------------|---|---|
| 過去                              | 過去について                               |                        |                                   | I   |   |
| 現在                              | 現在について                               |                        |                                   | II  |   |
| 行為カテゴリ02: 主体と環境                 |                                      |                        |                                   |   |   |
| 主体                              | 主に主体の行為などによる発言である場合                  | a                      |                                   |   |   |
| 環境                              | 主に環境についての発言である場合                     | b                      |                                   |   |   |
| 【実験I】行為カテゴリ03: エレメント            |                                      | 【実験II】行為カテゴリ03: 発言の連想度 |                                   |   |   |
| paths                           | イメージマップを作成している時に書いている要素がパスを示す場合      | p                      | 0                                 | 発言と挙動の内容が写真内そのものを示している時                     | 0 |
| edges                           | イメージマップを作成している時に書いている要素がエッジを示す場合     | e                      | 1                                 | 発言と挙動の内容が写真と同じ場所だが, 写っていないものや人から連想し「語り」を行う。 | 1 |
| districts                       | イメージマップを作成している時に書いている要素がディストリクトを示す場合 | d                      | 2                                 | 発言と挙動の内容が写真外のものあるいは出来事を示すとき, 写真外の場所を連想する。   | 2 |
| nodes                           | イメージマップを作成している時に書いている要素がノードを示す場合     | n                      | 3                                 | 発言と挙動の内容が予備実験の地域の範囲を大きく外れたものを連想し示すとき        | 3 |
| landmarks                       | イメージマップを作成している時に書いている要素がランドマークを示す場合  | l                      |                                   |   |   |
| 行為カテゴリ04: 行為指標                  |                                      |                        |                                   |   |   |
| 環境の印象/イメージ                      | 環境の印象やイメージが語られる時                     |                        |                                   |   | A |
| 環境の定位                           | 場所の定位に関する情報についての発言                   |                        |                                   |   | B |
| 環境の変化                           | その場所の様相の変化について語っているとき                |                        |                                   |   | C |
| 身近な環境                           | 日ごろから良く体験している環境について語る時               |                        |                                   |   | D |
| 自己の体験                           | 発言と挙動の内容が自分の行った体験が関係している時            |                        |                                   |   | E |
| 他者と共に行った体験                      | 発言と挙動の内容が他者と共に行った体験が関係している時          |                        |                                   |   | F |
| 他者が行った行為/姿                      | 発言と挙動の内容が他者の行った行為/姿が関係している時          |                        |                                   |   | G |
| 表記例                             |                                      |                        |                                   |   |   |
| <b>実験I</b>                      |                                      |                        | <b>実験II</b>                       |   |   |
| 「これが駅前の通りになってるわけだ」<br>⇒【II bpB】 |                                      |                        | 「こうあの早登り競争ってさ駆け足で登ってくんやて」⇒【I a2E】 |   |   |
| 現在/場所に関して/pathを書き・示し/場所の定位      |                                      |                        | 過去/主体に関し/写真外のを示し/自己の体験            |   |   |

## 7. 実験結果の分析・考察

### (1) 行為カテゴリ別指標の集計結果

実験によって獲得したプロトコルデータごとに付与された概念ラベルをもとにして2つの実験ごとに,各行為カテゴリに属する指標の数量を集計した。それらを表した物を表-4に示す。

エレメントの指標では paths についての数量が最も多く, 点的な nodes についても多かった。

発言の連想度に関しては, 発言と挙動の内容が写真外のものあるいは出来事を示し, 写真外の場所を連想する指標が最も多い。これは写真に写したシーンから地域の様々な場所への想起が起きていると考えられることができる。

表-4 行為カテゴリ別指標の集計結果

| 実験    | I: イメージマップ |      | II: 自由連想   |      |    |
|-------|------------|------|------------|------|----|
|       | 時間軸        | I 過去 | 58         | I 過去 | 84 |
|       | II 現在      | 49   | II 現在      | 89   |    |
| 主体と環境 | a 主体       | 41   | a 主体       | 61   |    |
|       | b 環境       | 66   | b 環境       | 112  |    |
| エレメント | paths      | 45   | 発言の連想度     | 0    | 42 |
|       | edges      | 2    |            | 1    | 41 |
|       | districts  | 26   |            | 2    | 78 |
|       | nodes      | 29   |            | 3    | 12 |
|       | landmarks  | 5    |            |      |    |
| 行為指標  | 環境の印象/イメージ | 18   | 環境の印象/イメージ | 59   |    |
|       | 環境の定位      | 49   | 環境の定位      | 39   |    |
|       | 環境の変化      | 17   | 環境の変化      | 19   |    |
|       | 身近な環境      | 0    | 身近な環境      | 0    |    |
|       | 自己の体験      | 9    | 自己の体験      | 29   |    |
|       | 他者と共に行った体験 | 8    | 他者と共に行った体験 | 8    |    |
|       | 他者が行った行為/姿 | 5    | 他者が行った行為/姿 | 17   |    |

### (2) 実験Iの分析: ネットワーク分析

#### a) 想起プロセスのネットワーク分析の方法と指標

プロトコルデータに付与された概念ラベルをもとにして, イメージマップを作成する中での被験者の地域イメージ想起のプロセスの文脈を分析する。ここでは, まずネットワークを作成するにあたり, 概念ラベルの発生した順序に従って時系列で並べたものを用意する。各概念ラベルをノードとして扱い, 前後関係を持つもの同士でパスを引くことで有向グラフのネットワークを作成しネットワーク分析による指標を導出する。

本分析では, ネットワーク分析として, 各ノードについて導出される指標である, 「媒介中心性」と「パス数」に着目して特徴的な概念ラベルの抽出を行う。

まず, 「媒介中心性」とは, ネットワーク中の特定のノードが, 他のノード同士の関係をどの程度媒介しているかを示す指標である。つまり, あるノードの前後関係に多様なラベルのまとまりがどの程度あるかという事であり, 想起のプロセスの節目となりやすさを示す指標であると考えられる。

もう一方の「パス数」という指標は, あるノードに直接接続されているパスの数を示す指標であり, 本研究においてはある概念カテゴリからある概念カテゴリに遷移した数がパスの数としてカウントされ

る事からイメージマップを作成する中で想起しやすい発話内容であると考えられる。

### b) 想起プロセスのネットワーク分析の結果と考察

本研究では媒介中心性とパス数に着目して特徴ある概念カテゴリを見ていく。

媒介中心性が高く、パス数も多い概念カテゴリは【II bpB】と【II bnB】と【I adA】となっている。この三つの概念ラベルが頻度が高く、多様なラベルと結びつきやすいということである。

【II bpB】は現在の事で環境について場所の定位の内容を語りながらエレメントの path を示している。【II bnB】は現在の事で環境について場所の定位の内容を語りながらエレメントの node を示している。イメージマップを描く際には現在のエレメントである path と node の位置を想起しやすいという事を示している。また、【I adA】は過去の事で主体の行為によりその場所の印象について語りながら district を示している。つまり、過去の思い出のある場所に

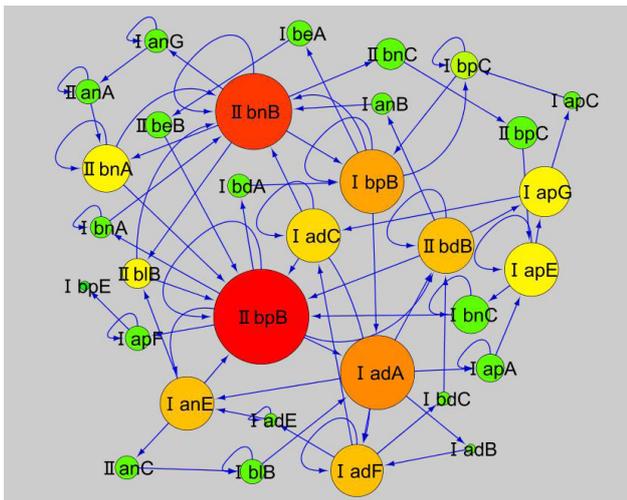


図-4 実験 I ネットワーク分析

表-5 ラベル毎の「媒介中心性」と「パス数」

| 実験 I : イメージマップ |        |     |        |        |     |
|----------------|--------|-----|--------|--------|-----|
| Label          | 媒介中心性  | パス数 | Label  | 媒介中心性  | パス数 |
| II bpB         | 0.4112 | 13  | I bpC  | 0.0382 | 3   |
| II bnB         | 0.2801 | 11  | II beB | 0.0363 | 2   |
| I adA          | 0.2659 | 8   | I beA  | 0.0342 | 2   |
| I bpB          | 0.1948 | 7   | I blB  | 0.0323 | 2   |
| II bdB         | 0.1391 | 6   | I apF  | 0.0323 | 2   |
| I adC          | 0.1245 | 5   | II anA | 0.0323 | 2   |
| I apE          | 0.1242 | 4   | I anG  | 0.0301 | 2   |
| I anE          | 0.1235 | 6   | II anC | 0.0301 | 2   |
| I adF          | 0.1148 | 6   | I bdA  | 0.0297 | 2   |
| I apG          | 0.1005 | 4   | I bnA  | 0.0258 | 2   |
| II bnA         | 0.0817 | 4   | I anB  | 0.0256 | 2   |
| I bnC          | 0.0613 | 2   | I apC  | 0.0167 | 2   |
| II bpC         | 0.0489 | 2   | I bdC  | 0.0086 | 2   |
| II bnC         | 0.0468 | 2   | I adE  | 0.0075 | 2   |
| II blB         | 0.0438 | 4   | I adB  | 0.0000 | 2   |
| I apA          | 0.0398 | 2   | I bpE  | 0.0000 | 1   |

ついて語っている。

この三つのラベルが今回の被験者においては、地域のイメージの「structure」の側面を想起する際に出てきやすいラベルであり、地域イメージの生成プロセスには過去の思い出ある場所も多く関わってくる事を示している。

一方で「媒介中心性」が高いながらも「パス数」が少ないものがある。これは他のラベルとのまとまりとして強い結びつきを持ったもの同士を橋渡しする節目に生じるため、想起のプロセスの転換点になるものと考えられる。

そのようなラベルは【I adC】と【I apE】である。【I adC】は過去の事で主体の行為により環境の変化について語りながら district を示している。【I apE】は過去の事で主体の行為により自己の体験について語りながら path を示している。これらより、過去に行った事や地域の変化から多様なイメージがまとまりとして引き出される事が考えられる。

### (3) 実験 II の分析 : 写真別の分析

#### a) 写真別の発話時間

写真別の発話時間を見ると写真7と写真13が最も多く発話していることが分かる。この2枚はどちらも眺望景であり、多くの語られる事があった。このような地域の特色を表すような特性景は語りを多く引出すという傾向がこの結果からみられた。

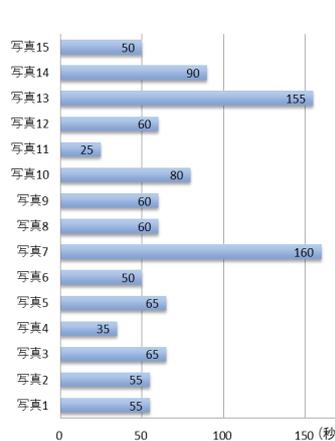


図-5 各写真ごとの発話時間



図-6 写真7



図-7 写真13

#### b) 写真別の概念ラベルの推移

写真別の概念ラベルの推移を分析する。写真7の大まかな流れは【II b0B】という現在の場所に関する写真の見たままの場所の定位から始まり、【I a3G】という過去の他人が行った行為などを連想し、【I a1C】、【I a2F】、【I a2E】と過去と現在で変化した場所や自らの体験などと地域に対しての発言が想起されていく様子がラベルによりわかる。

また、写真13では【II b0B】から始まる点では同

じであるが、【II b0A】という現在の写真を見たままの印象を語り、【II b2B】場所の位置的情報について語るという概念ラベルの推移が見られた。同じ眺望景であっても想起される内容には違いがあることが考えられ、被験者によりその内容も大きく異なることが予想される。

|    |        |    |        |     |        |     |        |
|----|--------|----|--------|-----|--------|-----|--------|
| 66 | II b0B | 82 | II a2E | 159 | II b0B | 175 | II b2B |
| 67 | I a3G  | 83 | I b2F  | 160 |        | 176 | II b2B |
| 68 | I a3G  | 84 | I a2F  | 161 |        | 177 | II b2B |
| 69 | I a3G  | 85 | I a2F  | 162 | II b0A | 178 | II b2B |
| 70 | I a2G  | 86 | I b2E  | 163 | II b0A | 179 | II b2B |
| 71 | I a1C  | 87 | I a2E  | 164 | II b0A | 180 | II b2B |
| 72 | I a1C  | 88 | I a2E  | 165 | II b0A | 181 | II b2B |
| 73 | I a1B  | 89 | I a2E  | 166 | II b2A | 182 | II a2A |
| 74 | I b1C  | 90 |        | 167 | II b2B | 183 | II b2A |
| 75 | I b1A  | 91 | I b2C  | 168 |        | 184 | II b0A |
| 76 | II a2B | 92 | I a2E  | 169 |        | 185 | II b2A |
| 77 | II a2A | 93 | I a2E  | 170 |        | 186 | II b0A |
| 78 |        | 94 | I b2B  | 171 | II b0A |     |        |
| 79 |        | 95 | I a2F  | 172 | II b2B |     |        |
| 80 | II b2B | 96 | I a2F  | 173 | II b2B |     |        |
| 81 | II b2E |    |        | 174 | II b2E |     |        |

図-8 実験IIにおける写真7(左)と写真13(右)の概念ラベル

Press, 1960

- 7) 海保博之・原田悦子, プロトコル分析入門-発話データから何を読むか, 新曜社, 1993
- 8) カテゴリの分類には既存研究および高田馬場を対象とした予備実験の結果を参考にした。

## 8. まとめ・今後の展開

今回の実験により概念ラベルを用いて発話を記述する事により、地域イメージの想起プロセスの推移を把握することができた。

今後の展開としては、複数被験者間の比較を行うことがまず必要である。各人の想起プロセスの構造分析を行う中で住民にとって地域イメージの核となるものや、対象を浮き彫りにし、地域への投錨との関係を考察していきたい。

本研究は JSPS 科研費 23360229 の助成を受けたものです。

## 参考文献および注

- 1) 中村良夫, 風景学入門, 中公新書, 1982
- 2) 中村良夫・西村浩・山下葉, 都市景観のコンテクストとデザイン-歴史的町並みを例として-, 「建築保全 1986, 11
- 3) 中村良夫, 新体系土木工学 58 都市空間論, 技法堂出版, 1993
- 4) 萩下敬雄・山田圭二郎・中村良夫, 景観認識における意識の連関と生成に関する基礎的研究, 土木計画学研究・論文集 No17, 2000. 09
- 5) 中村翔一, 場面に着眼したプロトコル分析による回遊行動に関する研究, 早稲田大学修士論文, 2009
- 6) Lynch K, 丹下健三, 富田玲子訳: 都市のイメージ, 岩波書店, 1968 原著 The Image of the City, MIT